

葉集を読む

松岡 隆子

夫の忌の名残雪とて斯くしまく

矢作 裕子

名残雪とは春となつて最後に降る雪のことで、雪の果、雪の別れ、涅槃雪などとも言われる。数年前お彼岸のころ横浜山手の吟行で掲句のような春の雪に出遭つたことがある。激しい春吹雪に視界は閉ざされ、人影もかき消されそうだった。正に〈名残雪とて斯くしまく〉であった。ご夫君の命日に降る雪は矢作さんにとつては何時であつても名残雪なのである。悼んでも悼み切れない胸の内を烟らすように名残雪がしまく。追慕の念はつるばかりであつたらう。

考へのふくらんでくる春の宵

見上 恵

春の一日がようやく夜に入つて間もない春の宵、ほの白い花の闇にゆつたりと時が揺蕩う。のんびりと構えて思いをめぐらせば決めかねていたことも自ずと解決できよう。先月号では〈あれこれと一人で決めて春寒し〉と詠まれていたが、春寒しの思いは解消されたようだ。値千金の春宵は人の心を潤してくれる。

陽春の天守閣より伊豆の海

梅澤 惇子

天守閣より伊豆の海が見えると言えば小田原城であろう。句意は明快で説明するまでもないが〈陽春の天守閣〉に作者の思いが感じられる。一望に広がる海は春の陽光を浴びて輝いている。かつて繰り広げられた数々の戦を思うと穏やかな景観がかけがえのないものに見える。天守閣にはもう戦の匂いはない。陽春の天守閣はいまや平和の象徴と言えよう。同時作の〈城跡に戦いく度草萌ゆる〉と併せて鑑賞したい。

退屈と言へる幸せスイートピー

三宅まどか

作者の三宅さんはまだ四十代、普段はきつと忙しく活動されているに違いない。ところが今コロナ禍により活動の場が制限され家居を強いられることが多くなつた。気分が滅入る人が多い中、作者はむしろ家居の時間を楽しんでいようだ。退屈だと言へる贅沢な幸せを甘受し、溢れるほどのスイートピーを活け、コーヒーなど淹れて、満ち足りた時間が過ごしている。〈退屈と言へる幸せ〉に季語のスイートピーが明るく寄り添っている。

遠き日の妣との宿り花月夜

中原 栄

花月夜とは美しい季語だ。朧めいた空に満月が浮かび、月明かりに咲き広がる花はあわあわと美しい。遠い昔の母との思い出の旅は花月夜と共に中原さんの胸の奥に仕舞つてあ